九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

泉屋家旧蔵「オランダ語文法書」と志筑忠雄「助詞考」

大島, 明秀
熊本県立大学文学部 : 准教授

https://hdl.handle.net/2324/2232313

出版情報：シーボルト記念館鳴滝紀要. 29, pp.1-8, 2019-03-22. シーボルト記念館
バージョン：
権利関係：

泉屋家旧蔵「オランダ語文法書」と志筑忠雄「助詞考」

大島明秀

はじめに

シーボルト記念館に収蔵されている泉屋家旧蔵の志筑忠雄「三種諸格」については既に論じたが[1]、同じく泉屋家から、日本語の文章にオランダ語が交えられた16葉の断簡が発掘されている。これらは「オランダ語文法書」と仮題が付されて毎葉クリアファイルに収められているものの、各葉の関係性や内容については不明のまま伝えられてきた。そこで本稿では、泉屋家旧蔵「オランダ語文法書」に着目し、その正体を同定するとともに資料的位置づけについて検討する。

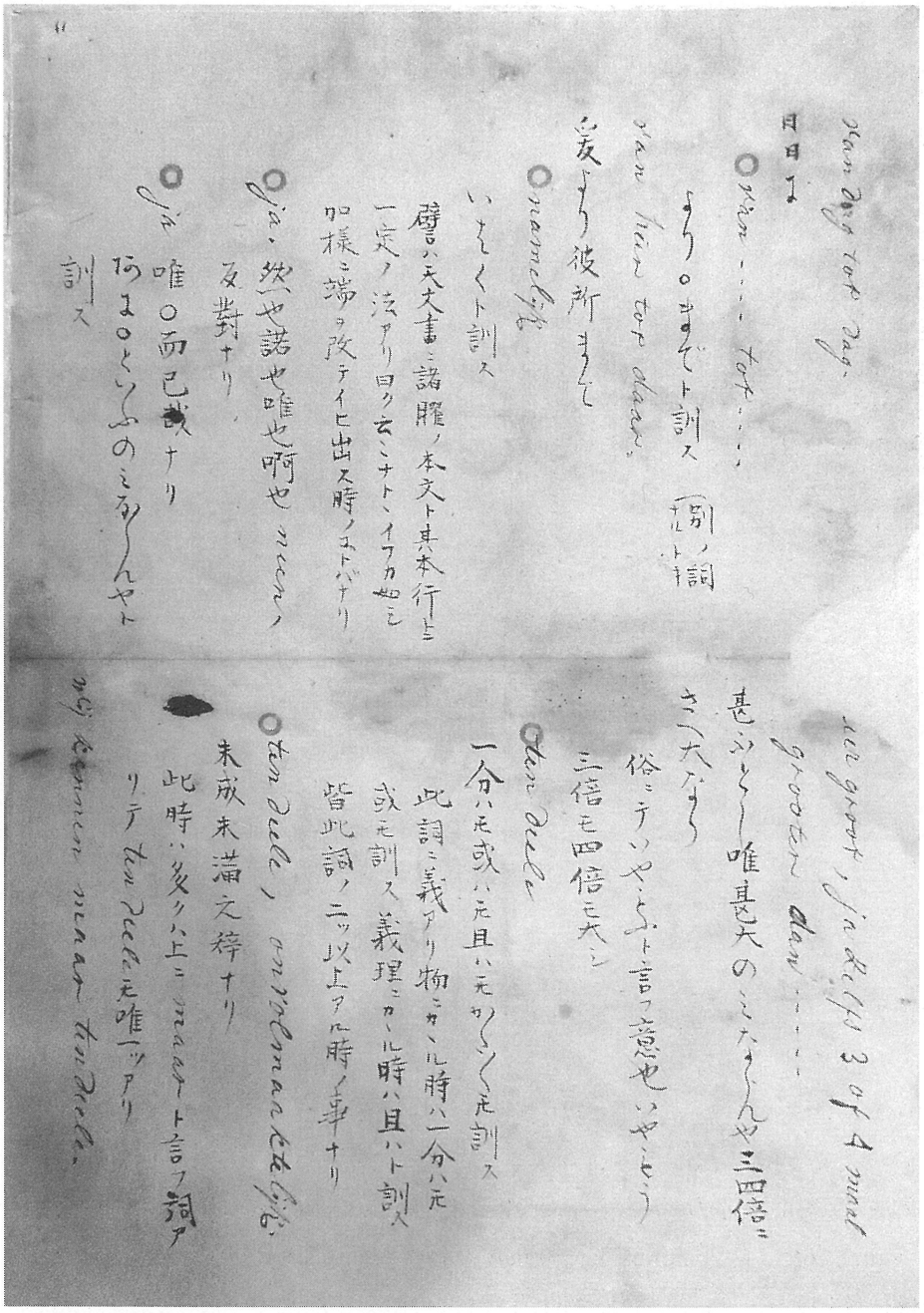

図１　泉屋家旧蔵「オランダ語文法書」第1葉（シーボルト記念館蔵、和13シ1）。

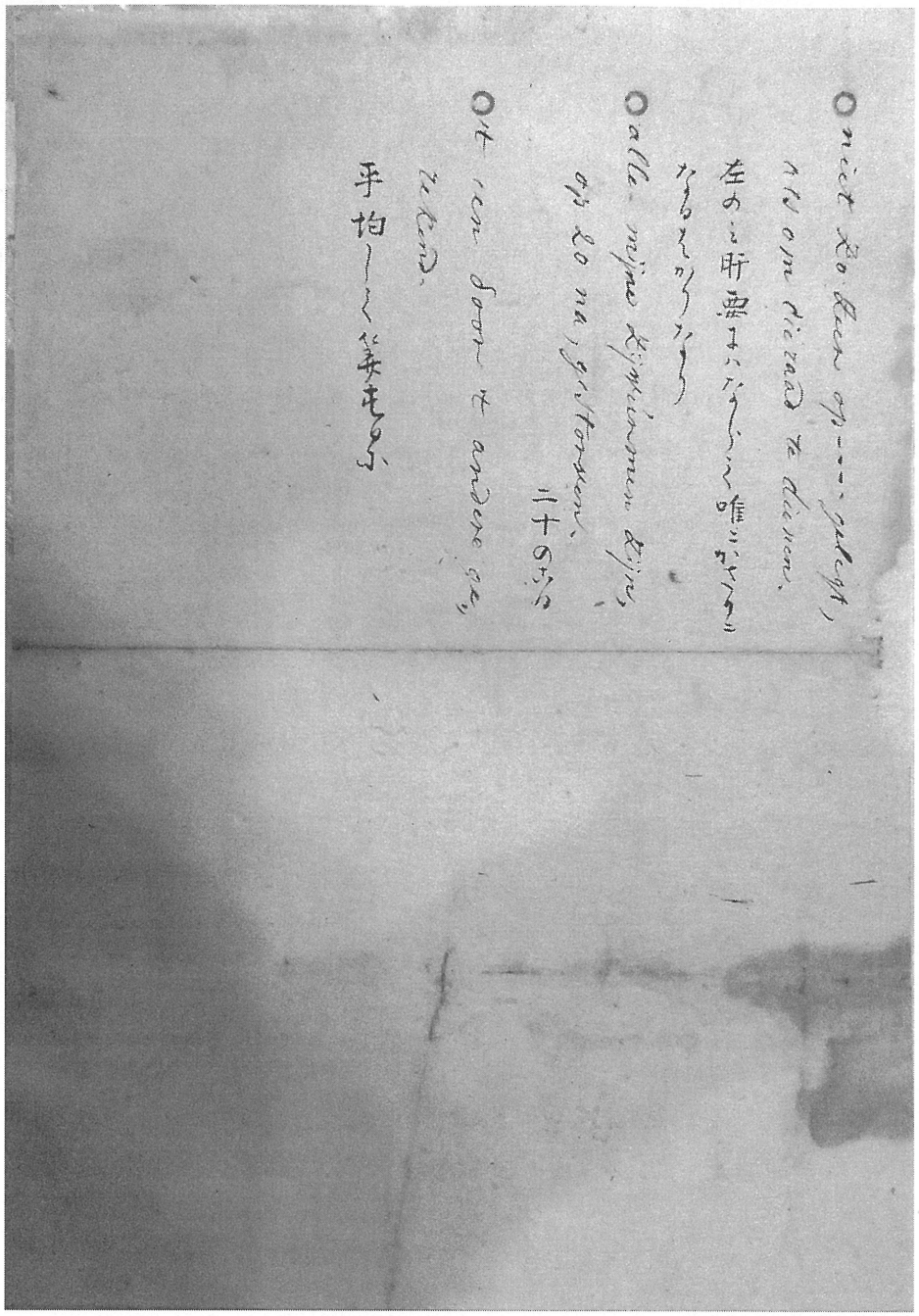

図２　「オランダ語文法書」最終第16葉（和13シ17）。

一、泉屋家旧蔵「オランダ語文法書」の概要と正体

「三種諸格」と同じく泉屋家の畳の下敷きの一部から発見された「オランダ語文法書」（和13）は、16葉の断簡から成る[2]。ただし、第12葉の上段と下段に別々の整理番号が付されていることから、番号は17まで認められる。

本資料の正体を突き止めるために、手始めに第1葉の丸印で示された項目を挙げていくと、上段の4項目は「van....tot....」、「namelijk」、「ja」、「ja」で、下段の2項目は「ten deele」、「ten deele, onvolmaaktelijk.」（図1）で、志筑忠雄「助詞考」と比較したところ、これら項目の存在と配列が一致することが判明した[3]。さらに最終第16葉の丸印項目「niet zo zeer op....gelegt, als om cieraad

te dienen.」、「alle mijne zij wúrmen zijn, op 20 na, gestorven.」、「’t een door ’t andere gerekend.」（図2）についても、綴り違いなどの細かい点を除けば一致している[4]。また、別資料として保管されている泉屋家旧蔵「助詞考」（和27）は表題のみ記された零葉であるが、これを「オランダ語文法書」と比較してみると、料紙や筆跡は間違いなく同一である。

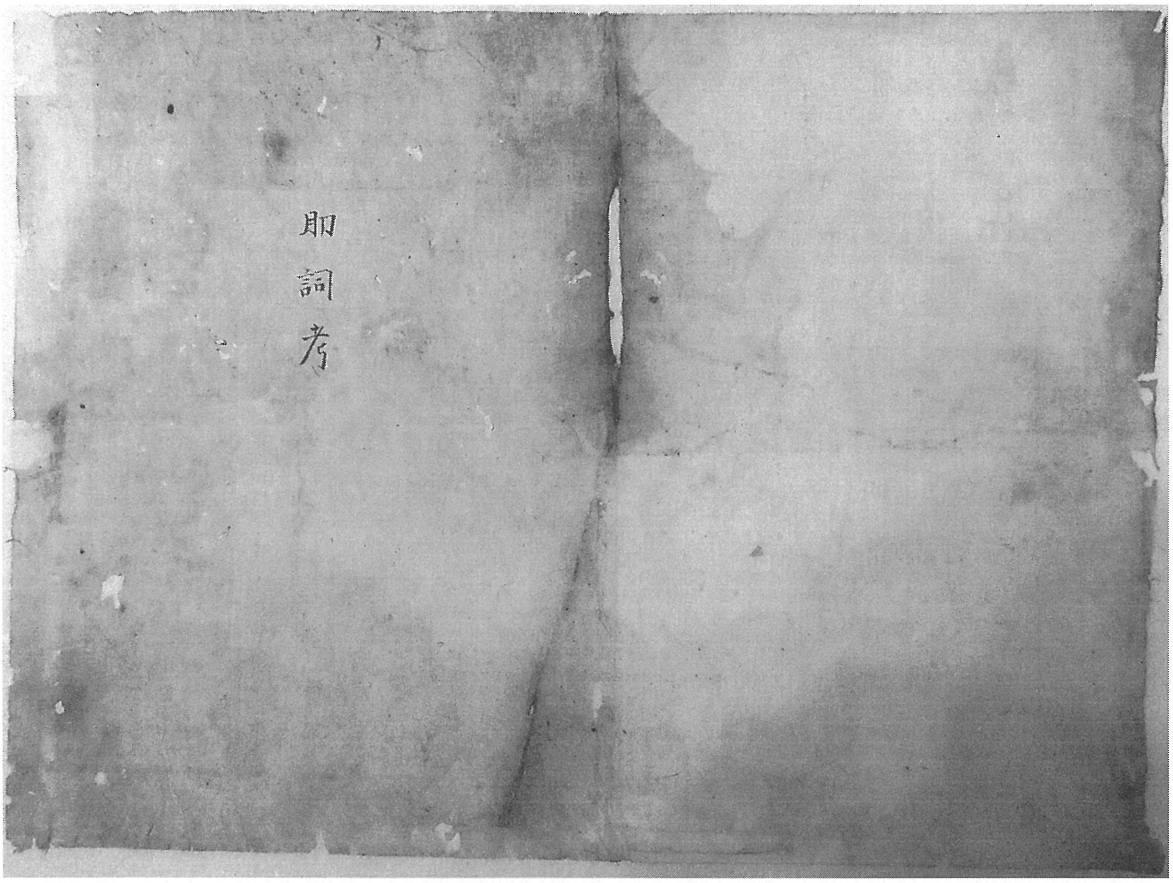

図３　泉屋家旧蔵「助詞考」（シーボルト記念館蔵、和27）。表紙のみの零葉。

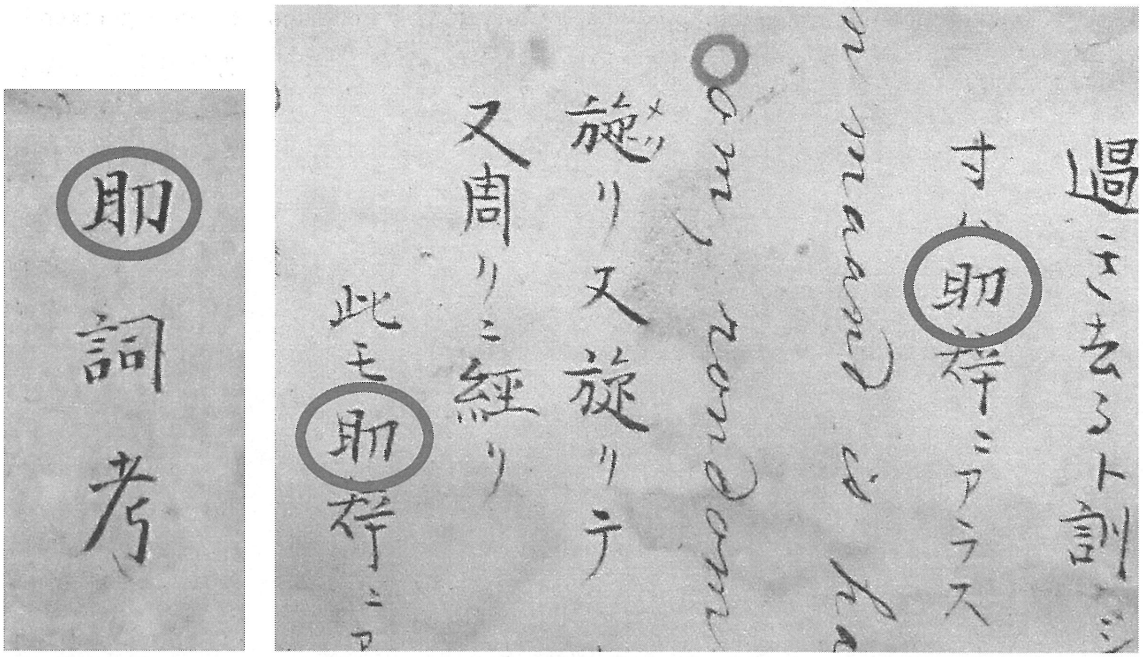

図４　左は前掲「助詞考」（和27）の拡大図。右は「オランダ語文法書」（和13シ2）の部分拡大図。とりわけ「助」字が特徴的で、筆者の癖が一致している。

以上を勘案すると、泉屋家旧蔵「オランダ語文法書」の正体は志筑忠雄「助詞考」であり、もともとは現在別に保管されている同家旧蔵「助詞考」を表紙とした一つの冊子であったが、これを反故とする際に各葉の綴じがはずされ、それが原因で資料が四散したものと見られる。

ところで、志筑忠雄「助詞考」の構成は、①例言、②（目次）、③本文、④（文法解説）から成り、括弧で示した要素②と④については有さない本もある。よって全ての写本に備わった基本形は、①と③の二要素である[5]。

本文に目を移すと、「助詞考」は文法書というよりは語彙集で、章節などはなく、丸印でオランダ語の単語や句が挙げられ、ついでそれに対応する和訳が記され、続いてその語を用いた蘭文の用例とその和訳文が示される構成となっている。「助詞考」の収録範囲は、冠詞、代名詞、前置詞、副詞、前置詞、句に及ぶ一方、形容詞に関しては僅かに2例のみが示されている。名詞、動詞および助動詞を明確に除外している点に加え、基本的に形容詞も収録対象としていない点は特徴的である[6]。

ここで早大B本の丸印項目を数えると152項に及び、そこに泉屋家旧蔵本のみに見える第115項目と、記述は認められるものの丸印で立項されていない第118項目を加えると、「助詞考」は計154項目に上る。以下、早大B本の項目と泉屋家旧蔵本との対応関係を示したものが表１である。なお、早大B本で最後に「平均して算するに」という和文に丸印が付されているが、オランダ語でないことから明らかな誤りであるため表には反映しなかった。

表１から泉屋家旧蔵「オランダ語文法書」の各葉は、志筑忠雄「助詞考」の後半部分、第75項目以下に相当することが判明した。欠損部分を除けば最終項目まで漏れなく残存しているところには泉屋家の反故の使い方が見えて興味深い。ここには「助詞考」の前半部分も、畳や別の場所の下敷きや裏張りとして、まとめて用いられた可能性が窺える。

表１　志筑忠雄「助詞考」と泉屋家旧蔵本の対応関係

	早大B本「助詞考」の丸印項目	泉屋家旧蔵本の該当葉（整理番号）	備考
	例言		
1	Alleen		
2	alleen, alleenlijk		
3	Alleenig, aleen.		
4	In zo verre, in zo verre dat.....		
5	Eerlang		
6	Naardien, dewijl, dewijle, nademaal, vermits, mitsdien		
7	omdat, door dien om rede van.		
8	De reden door		
9	maar		
10	maar		
11	maar, mits		
12	mits		
13	Dog, doch.		
14	Echter, nogtans, niet te min		
15	het zij		
16	het zij.....of		
17	hoe, het ook zij		
18	Evenwel		
19	Zoo dat		
20	zoo.....dat		
21	□□ dat, ten Einde dat.		
22	weegens		
23	daar om, die reden		
24	Derhalven, bij geovolg, overzúlks		
25	ingevolge, úit hoofed		
26	gevolglijk		
27	waar door		
28	want.		
29	Dús, aldús, op dat wijze.		
30	als, gelijk		
31	als		
32	als		
33	als		
34	maar		
35	Zoo.....dat		
36	zoo als		
37	terwijl, ondertússhen.		
38	als dan		
39	toen		
40	als		
41	als		
42	zoo.....als		
43	zoo wel.....als.		
44	zo wel als		
45	zo		
46	zo		
47	zo		
48	zo wanneer		
49	al		
50	al hoewel, alshoon, hoewel, shoon, ofshoon, niet tegenstaande		
51	al		
52	al		
53	al.....de		
54	alaan, alvoort		
55	Iindien, bij aldien, als.		
56	ten waare		
57	ten zij		
58	ten minsten.		
59	of ten minsten		
60	zoo min		
61	qúansúis, gelijk als, als of, gelijk of.		
62	zelfs		
63	zig zelfs		
64	zelf, ven zelve		
65	zelfe, zelve		
66	Des selfs, der zerver.		
67	dezelve, 't zelve.		
68	En.		
69	En		
70	En		
71	De		
72	eel liever, veeléér.		
73	liever.....als, liever als		
74	veeléér		
75	liever hebben	15	
76	f liever	15	
77	bij voorbeeld	15	
78	Daaren boven	15	
79	misshien, mogelijk.	15	
80	van.....tot.....	15	
81	van.....tot.....	1	
82	namelijk	1	
83	Ja	1	
84	Ja	1	
85	ten deele.	1	
86	ten deele, onvolmaaktelijk.	1	
87	met een Woord	11	
88	Zogenaamde	11	
89	Eigentlijk zogenoemde.	11	
90	om zo te spreeken.	11	
91	Een en andere	2	
92	niet alleen.....,maar ook	2	

93	hoe.....hoe.....	2	
94	om.	2	
95	om, rondom	2	
96	om.	16	
97	om, aan	16	
98	om	16	
99	om en om	16	
100	Door	16	
91	of	16	
92	naaúwlijks.....of.	3	
93	of, als of	3	
94	of	3	
95	toch	4	
96	toch	4	
97	of	4	
98	Dan, dan of	4	
99	dan.	4	
100	dan, als	4	
101	dan	4	
102	Dan.....Dan.....	5	
103	ook	5	
104	ook, om die reden	5	
105	nog.....nog.....	5	
106	nog	5	
107	nog niet	6	
108	te meer	6	
109	naaúw lijks	6	
110	anders, anderzins, andersins.	6	
111	Behalven	6	
112	úitgezonderd	6	
113	Bijzonderlijk	6	
114	in tegen deel	6	
[115]	[daar en tegen]	7	早大B本ではこの項目が脱落
116	Eindelijk	7	
117	min	7	
[118]	[op verre na]	7	早大B本では記述は認められるが、項目となっていない
119	mogelijk	7	
120	mogelijk, wel zijn	7	
121	met	7	
122	met	7	
123	met	8	
124	Voor zo verre	8	
125	niet minder.	8	
126	kan 't zij als 't mogelijk is	8	
127	waaare 't als 't waare	8	
128	Eer lang, wel haast.	8	
129	op verre na.....niet	8	
130	veel min	8	
131	gaarne	8	
132	niet	8	
133	geen	9	
134	geen	9	
135	in der daad of met verbeelding.	9	
136	te	9	
137	te	9	
138	te	10	
139	te	10	
140	te	[10]	この部分泉屋家旧蔵本破損につき、項目内の記述は認められるが、項目名の確認ができず
141	te	10	
142	te	10	
143	De	10	
144	De	[14]	この部分泉屋家旧蔵本破損につき、項目内の記述は認められるが、項目名の確認ができず
145	De	14	
146	De	14	
147	Den	14	
148	Het	12	
149	het	13	
150	wel	13	
151	ik ben ú verpligt	13	
152	ik bedance ú.	13	
153	niet zo zeer op.....gelet, als om Cieraad te dienen.	17	
154	alle mijne zij w□rmen zijn, op 20 na, gestorven	17	
	文法解説		

二、泉屋家旧蔵本の位置づけ

泉屋家はよく知られた住友泉屋家とは無関係の家で、長崎市寺町の浄安寺過去帳を繙くと、遠祖は泉屋市良左衛門で、十七世紀初頭には長崎に居住していたことが分かる[7]。

これまで泉屋家のオランダ語学習の実態や、同家の蘭学を修めた人物については知られておらず、その学問背景は不明であるが、志筑忠雄「三種諸格」を旧蔵していたことからも分かるように、書物収集だけに留まったかもしれないが、オランダ語学習を志した人物がいたことは間違い

なく、その他の志筑の著作まで所有していた可能性が考えられる。

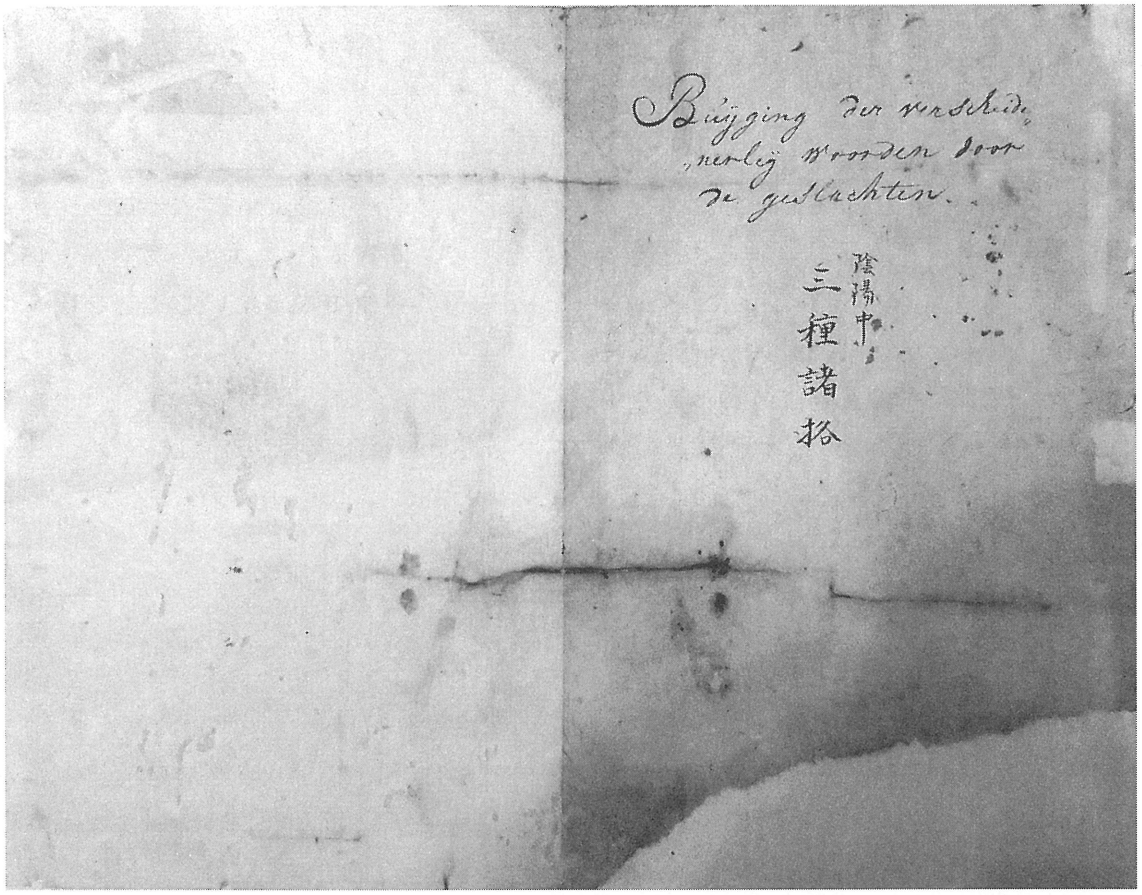

図５　泉屋家旧蔵「三種諸格」（シーボルト記念館蔵、和12サ1）。

さて、志筑忠雄「助詞考」原本の成立時期を探る上で、江戸詰の津山藩医・宇田川玄随が撰した「蘭学秘蔵」が手掛かりになる。その巻之一に志筑忠雄の「和蘭詞品考」が引用されているが、そこの頭欄に「元木門人／志築[ママ]忠次郎／助辞考」と注が付されている[8]。

「和蘭詞品考」と「助辞考」（「助詞考」）とを混同しているところは不審であるが、いずれにせよ玄随が没したのは寛政9年12月18日（1798年2月3日）であることから、それ以前に「助詞考」が成されたことは疑いない。このことは、享和3年（1803）から文化2年（1805）頃に相次いで成立した「三種諸格」、「四法諸時対訳」といった志筑のオランダ文法に関する文献より早く編まれたことを意味する。

また、先に挙げたように、志筑忠雄「助詞考」の本質は語彙集であり、その構成は、①例言、②（目次）、③本文、④（文法解説）から成り、項目②と④については、これを備える本と有さない本とがある[9]。愚見では、とりわけ項目④は後世の書写者が付加したもので、「助詞考」原型には備わっていなかったものと考えており、項目①に関しても、後世の学習者が便宜上付したものと見ている。よって、原型は①と③のみの構成から成るのではないかと想定している。

ここで泉屋家旧蔵本の構成を確認すると、まず前半部分については欠落しているため、項目①（目次）に関する有無は不明である。一方、項目②本文の末尾部分を見ると（図2）、上半葉の途中で第154項目が終えられているものの、残りの上半葉も下半葉も白紙となっている。ここから泉屋家旧蔵本は④（文法解説）を持たない本と考えられ、「助詞考」原型からある程度距離が近い内容を備えているものと推測することができる。

なお、泉屋家旧蔵本に備わり、早大B本には脱落している第115項目は、志筑忠雄が著した「助詞考」原型を復元する上で注目すべき要素と見られるが、未見の写本もあるため「助詞考」の文献学的な課題については後考に俟つ。

おわりに

以上、これまでシーボルト記念館に不明のまま伝わっていた泉屋家旧蔵「オランダ語文法書」が志筑忠雄「助詞考」の一部であることを指摘した上で、同家旧蔵本の現存部分が、154項目に渡る「助詞考」の後半第75項目以下に該当し、そこから最終葉まで揃っていることを明らかにし、加えて毎葉の関係性と本来の配列を同定した。

また、泉屋家旧蔵本は、本文が終わった後に「文法解説」を備えないタイプの「助詞考」であることや、早大B本と比較すると泉屋家旧蔵本にのみ認められる項目が存在するなど、志筑忠雄「助詞考」の原型を復元する上で重要な手掛かりを得られたが、全国に散在する「助詞考」写本の書誌調査を踏まえた文献学的検討については別稿を期したい。

（熊本県立大学准教授）

1　拙稿「志筑忠雄「三種諸格」の資料的研究」（『鳴滝紀要』第28号、2018年）。

2　泉屋家から文書群が発見された経緯と文書の概略については中西啓が略述している。「泉屋家文書について」（『鳴滝紀要』第10号、2000年）、99-100頁。

3　寺田智美「翻刻『助詞考』（二）―中野柳圃『助詞考』（文庫8 C559）―」（『早稲田大学図書館紀要』第49号、2002年）、84-85頁。便宜上、比較には活字化されている早稲田大学蔵本を用いるが、同大学に2本蔵されている「助詞考」のうち寺田が原型に近いと目測したB本を底本とした（以下、早大B本）。「早稲田大学蔵『助詞考』二種の考察」（『早稲田大学図書館紀要』第50号、2003年）。なお、写本によって「助詞考」と「助字考」、あるいは「助辞考」と表題が分かれるが、ここでは資料名を「助詞考」とした。また、著者名は志筑忠雄に統一した。

4　前掲寺田智美「翻刻『助詞考』（二）―中野柳圃『助詞考』（文庫8 C559）―」、97頁。

5　杉本つとむ「「助詞考」の考察」（『江戸時代蘭語学の成立とその展開―長崎通詞による蘭語の学習とその研究―』、早稲田大学出版部、1976年所収）、325-342頁。

6　服部隆「江戸時代のオランダ語研究における「助語・助詞」―宇田川玄随『蘭訳弁髦』・中野柳圃『助詞考』を中心に―」（『上智大学国文学科紀要』第24号、2007年）、128頁。

7　泉屋家については、現在の当主泉屋郁夫氏からお話を伺った織田毅氏の御教示による。

8　杉本つとむ「宇田川晉撰『蘭学秘蔵』の考察―志筑忠次郎、助辞考」（『武蔵野女子大学紀要』第9号、1974年）。なお、旧字は常用漢字に改めた。また、頭注の「助辭考」と「元木門人／志築忠次郎」の筆跡は同じであるが、比較すると前者の方が色濃く墨書されていることから、前者と後者の記入時期がずれる可能性があることを指摘しておく。

9　前掲注3参照。